法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<研究室余滴>ことばと拳固

マルヤマ, シュウキチ / 丸山, 修吉 / MARUYAMA, Shukichi

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社會勞働研究
(巻 / Volume)
2
(開始ページ / Start Page)
112
(終了ページ / End Page)
113
(発行年 / Year)
1954-11-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00017366

流の農民が運動から次第に離反して行くのにもめげず、谷中村の農民と共に終始闘い不遇のうちに没したが、農民運動家として斯くまで徹底して初志をまげずに活動した人は、未だ嘗て見ないといっても敢て過言でない。

彼が残した遺産それは農民運動に対する変らざる情熱と、そのしつような闘争である。河上肇博士が学生時代、彼の熱弁に感激して、まとっていた外套を其場でカンパした有名な逸話もこの頃のことである。

そしてこの感激が引継がれて其後多くの社会運動家達を産み、米騒動・第一次欧州大戦後の不況を契機として近代的農民運動の勃興を促したのであったが、いわば翁は近代的農民運動の指導者を産み出す母胎であり、その功せきは高く評価さる可きであると思う。

また我国の農民運動は今や自作を含め全農民的立場に於て再転開されんとするの形勢を見つつある時、この闘争は更めて再検討さる可き時期であるとも考える。

ことばと拳固

丸山修吉

「ことばで言ってもわからないから拳固でいいきかせてやる」という勇しい言葉がある。言論は無力だから実力行使というわけだ。この場合、ことばと拳固がまったく対照的なものとして考えられているのはたしかだ。そうかと思うとわれわれは「そのことばに打のめされた」とか、「そのことばは毒矢のように心臓を貫いた」などという文句にも出会う。こうなるとことばは、拳固どころか、人を殺すことさえできるわけだ。

もちろんことばは人により、場合によって無力でもあれば、拳固にもなるが、厳密にいうと、ことばと（言語）拳固（普通の刺戟）とはいったいどういう関係にあるのだろうか。この質問に答えてくれるのがパヴロフの第二信号系の理論である。

パヴロフによれば、動物の場合には外的刺戟がその感覚器管に直接作用して、その動行を支配している。しかし人間の場合には、それだけではなく、別の系列の刺戟によってもその行動をいちじるしく規定されている。こういう特別の刺戟が、言語なのだ。

たとえばここに桜があるとする。その色やにおいや形、すなわち桜独特の外的刺戟が桜という客観的実在の第一信号だが、「サクラ」ということばは、そういう桜独特の刺戟に代る一種の信号である。いいかえれば「サクラ」ということばは第一信号の信号であり、客観的実在である桜の第二信号なのだ。この信号の特徴は現実を抽象化し、一般化して、高い、人間の思考を組織する点にある。

パブロフが晩年に樹立した第二信号系についての理論は、言語学に自然科学の土台を与えたもので、この土台の上に新しい言語学が戦後急速に建設されている。

そこで前にもどって、「ことばで言ってもわからないから……」というのが、もし「ことばの拳固ではわからないから、現実の拳固を……」という意味であれば、それをさらに「第二信号ではわからないから、第一信号で……」といいなおしてもよかろう。

事実、あることを人にわからせるには二つの方法がある。一つは第一信号を与えること、もう一つは第二信号を与えることだ。

象を知らない人に、「哺乳動物中長鼻類に属するもので……」などといくらことばで説明しても概念が複雑になるばかりで、はっきりしない。それよりも動物園につれていって、実在の象がもつ独特の形、色などの刺戟を直接感覚させた方がはるかによい。百聞一見に如かずとはこのことだが、しかしその反対に第一信号ではかえってわからない場合もある。「ウォール街」を知らないからといって、いくらアメリカまで飛んでいってもその実体はつかめまい。ここに、第一信号と第二信号の根本的な差がある。

話をもう一度前にもどそう。もともと「ことばではわからないなら……」という意味は、「概念ではわかりにくいから、表象で……」などというおとなしいものではなかった筈である。その本当の意味は、「ことばの力で駄目なら、物理的な力で……」というわけであろう。

だがここでもまた問題がでてくる。いったいことばは力を持っているのだろうか。昔アメリカ独立戦争のころ、パトリック・ヘンリーの「自由か死か」という演説はアメリカ植民地人を決起させたという。また近くは独ソ戦で重囲におちたモスクワからの「スターリン元帥はモスクワに在り」との放送は、ソヴェトいく百万の青年をふるい立たせたとも伝えられている。

わが国には「言霊」ということばがあり、イギリスには「ワード・マジック」（ことばの魔力）ということばがあるが、もともと言語というものは、第一に伝達の手段であり、第二に思考の用具にすぎないものだから、言語そのものに不思議な霊や力があるわけのものではない。

アメリカ植民地人を決起させたのはパトリック・ヘンリーの熱と力であり、ソヴェトの青年をふるい立たせたのはスターリンがモスクワに頑張っているという事実であることは明らかだ。ことばという伝達手段に力があると思う人は、電話線に魔力ありと信じた昔のアメリカ・インディアンと同じだということになる。

それではことばに「マジック」がないかというと、全然ないわけでもない。たとえば「戦力なき軍隊」とか戦車を「特車」というのは一種のマジックといえるが、しかしこの種のマジックは正常な人間にはきかない。

さてことば自体に力がないとすれば、「ことばの力で駄目なら……」というのは、「ことばで話している自分の人間的威信がきかなければ、物理的な力で……」と改訂せねばならない。そしてこれならば、その気持は私にもよくわかる。